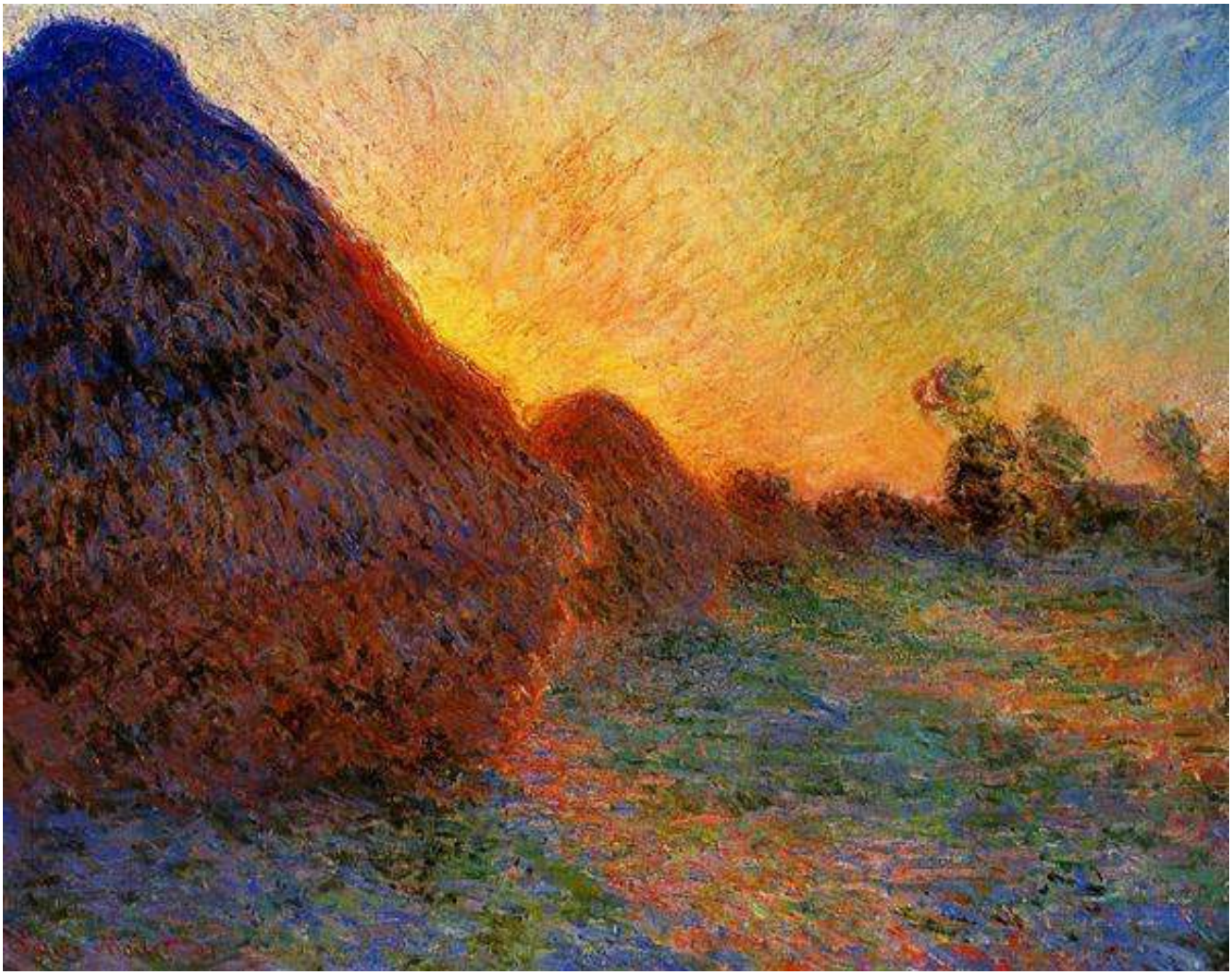
発達理論の学び舎

Back Number: Vol 104

Website:「発達理論の学び舎」



© YOHEI KATO 2019

目次

2061. メモを残す人間

2062. バルトークの音楽宇宙との出会い

2063. ある日曜日から

2064. 創造プロセスについて

2065. 躍動する生命と身体

2066. 他者の謎の上を他者の足で歩こうとする人間

2067. ライフワーク

2068. 天空へと続く道

2069. 暴走車両を追跡する夢

2070. 夕方に向かっていくひと時

2071. 認識世界の転調

2072. 内面現象の記録的文章化と夢

2073. 水平的・垂直的発達に内在するある感情について

2074. ポスタープレゼンテーションに向けて

2075. あの夕焼け空

2076. 無意識の発達運動について

2077. 思い出の品

2078. 祭りの後：ポスタープレゼンテーションの終了

2079. ポスタープレゼンテーションの振り返り

2080.「1993年夏」

© YOHEI KATO 2019

2061. メモを残す人間

昨日、「応用研究手法」のコースの最終課題のドラフトを作成し、一晩寝かせた。今日は夕方にもう一度レビューをし、誤字脱字などを含めて追加・修正を施したい。そのレビューをもってして、もう一人の受講者であるグルジア人のラーナにドラフトを送り、お互いのレポートに対してフィードバックを行う。

もう一つ本日中に取り掛かっておきたいのは、来週の水曜日に控えているポスタープレゼンテーションの説明資料を完成させることである。年明けすぐにそのドラフトを研究アドバイザーのミヒャエル・ツショル教授に送っており、特に修正事項もなく、その時点で資料は完成していたと言える。ただし、そこからまた研究のアイディアを少しばかり練り直したため、その新たな追加項目を資料に盛り込んでおきたいと思う。今日は学術研究に関する仕事をその他に行うことをせず、文章を書くことや曲を作ることに多くの時間を充てたい。

昨日ふと、「自分はメモを残す人間である」という考えが降りてきた。言い換えれば、メモを残すことが自らのライフワークであり、自らの使命であるという考えだった。

何に対するメモなのだろうか？次にそのような問いが浮かんだ。おそらくそれは、人間存在に関するメモだと言えるだろう。自己を取り巻く内外の事象をつぶさに観察し、観察を基にした考察をメモとして残し続けていくのである。それは単なるメモであって、それ以上のものではない。特に編集をするわけでもなく、編集は自らの仕事ではなく、とにかくメモを残すことが自分のワイフワークなのではないか、という考えが降りてきたのである。

「メモを残す」という言葉を聞いた時、まさに今このようにして書き綴っている日記や毎日作っている曲というのは、言ってしまえば単なるメモなのだ。まさにそれは一人の人間存在に関するメモであり、個人的なメモを通じて人間存在の普遍性の一端を明らかにしようとするためのメモなのである。

メモを残すことがワイフワークであり使命であるというのは幾分滑稽に響くかもしれないが、そうした滑稽さゆえに、この世界にはメモを残すことに専心する人間はほとんどいないように思える。そうしたことを考えてみると、自分に降ってきたメッセージの通りに生きてみるのも意義のあることなのかもしれない。人間存在に関するメモを取り続ける人間がこの世界に一人いてもいいはずである。

日々の日記と曲は、一個人の存在に関する絶え間ないメモとしての詳細な記録であり、それを起点として人間存在の普遍的な本質を探る材料になるはずだ。そのようなことを思う。今日も文章として曲として、できる限りのメモを残したい。フローニンゲン：2018/1/27（土）06:58

No.696: Optimal Balance

I guess that I'm leading my daily life in an optimal balance between my scientific and practical work. Of course, not only just my "work" but also my "life work" such as writing a diary and composing music is fulfilled. I'll keep this optimal balance, though I may have to spend more time in my professional work in February and March. Groningen, 09:27, Monday, 1/29/2018

2062. バルトークの音楽宇宙との出会い

これから三月末まで研究インターンに従事する。来週にもう一度、インターンにおけるアドバイザーを務めていただくジャン・ディエナム博士と、昨年にフローニンゲン大学のMOOCに関するワークショップを提供していた実務的な責任者の方を交えてミーティングを行う。

二月の最初の月曜日からいよいよ研究インターンが開始される。ディエナム博士と先日ミーティングをした時に、私が仕事ができるようにオフィスを準備すると述べてくださり、普段仕事を進めている自宅の書斎以外の場所で仕事をすることは、また新たな外部刺激となるだろう。

この研究インターンと並行して、三月末をめどに、日本企業との協働プロジェクトが二つほど落ち着く予定である。落ち着くと言っても、それは現在一緒に取り組んでいるプロジェクトが一旦一つの形になるというだけであって、四月以降もまた今回のプロジェクトをもとに新たな協働プロジェクトを進めていくことになるだろう。そうした状況にあるのは確かだが、スケジュールを改めて眺めると、インターンと協働プロジェクトが一旦落ち着きを見せる四月の初旬に一週間か十日ほどの短い休みを確保できそうだ。この時に是非とも、以前計画をしていたポーランドのワルシャワとハンガリーのブダペストに訪れたいと思う。

両都市にそれぞれ三日か四日滞在することができれば、随分と二つの都市を堪能できるように思う。多くの場所に足を運ぶのではなく、ワルシャワではショパン博物館、ブダペストではリスト博物館に訪れることぐらいしか今のところ予定はなかった。しかし今朝方、バルトークの音楽をふと聴いてい

たところ、そういえばバルトークもハンガリーの出身であることを思い出し、バルトークについて調べてみた。すると、ブダペストにバルトーク博物館があることを見つけ、そこにもぜひ足を運んでみたいと思った。

これまでバルトークのピアノ曲をあまり真剣に聴いてこなかったのだが、早朝から今に至るまでずっとバルトークの曲を聴いていると、何とも言えない魅力のようなものが少しずつ見え始めた。

早朝から聴いていたのは、バルトークが息子のために書いた『ミクロコスモス』と呼ばれる、全153曲からなるピアノのための練習曲集である。この練習曲集を起点に、そこからSpotifyを用いてバルトークのピアノ曲の全集をダウンロードした。この全集は合計で九時間ほどに及ぶ内容であり、一つ一つの曲の長さを見てみると、短いものが多いことに気づく。

バルトークの曲や世界観についてはまだまだ知らないことが多いが、どうも私がバルトークに惹かれ始めた一つの理由は、短い曲を無数に書いていくことを通じて、自身の内側に音楽宇宙を構築したことにあるのではないかと思う。

バルトークの存在、そして彼が創出した音楽宇宙に強く共鳴するものがあったため、早速私は、『ミクロコスモス』の全作品が収められた“Mikrokosmos – Complete (2016)”という楽譜をイギリスの書店に注文し、その他のピアノ作品が収められた“Piano Music of Bela Bartok”という二巻にわたる楽譜をアメリカの書店に注文した。それらの楽譜をもとに、バルトークの音楽にも範を求め、バルトークの作曲技法と音楽思想をこれから徐々に学んでいきたいと思う。フローニンゲン：2018/1/27（土）09:29

No.697: A Song for Today and Tomorrow

I suppose that we are sometimes inclined to sing a song in a spontaneous way. I created a piece of music based on the continuous self-organization that we always experience in our daily life.
Groningen, 09:53, Monday, 1/29/2018

2063. ある日曜日から

今朝は五時過ぎに起床し、五時半過ぎから本日の活動を開始した。とても静かな日曜日の朝である。

昨日同様に、書斎の中にバルトークのピアノ曲を掛けながら、早速一日の仕事に取り掛かることにした。昨日も作曲実践に取り組む中で、他の作曲家が残した楽譜というのは実に優れた教材であると改めて思った。

昨日はフォーレの曲を参考にしており、細かく楽譜を辿ってみると、フォーレが作品に込めた意図と技巧の一端が見えてきた。もちろん、今の私にはそれらの全てが見えるわけではなく、あくまでもその一部にしか過ぎないだろうが、こうした発見をもたらすのは意識的にその対象と向き合うからである。

その作品に集中し、意識的に分析を行っていくことでしか見えてこないものがあるようなのだ。一方で、こうした分析を継続していると、ある時その作品からふと大きな気づきを得るようなこともある。すなわち、その時には意識的に対象と向き合っていなくても、重要な気づきが無意識的に獲得されるようなことが起こる。ただし、こうした現象が起こるためには、やはり前提条件として、それ以前に対象と真剣に向き合ったことがあるかどうかが鍵を握るだろう。

そのように考えると、気づきが意識的にもたらされるものであっても、無意識的にもたらされるものであっても、そうした気づきを得るためにはどこかで対象と真摯に向き合ったことがあるかどうかにかかっているような気がする。現在継続的に取り組んでいる作曲実践の経験からすると、そのようなことが言える。

今日は休日であるため、早朝のこの時間帯からまずは作曲理論の学習に取り掛かりたい。数日前から読み返している作曲理論のテキストの再読を進め、午前中の半ばあたりで本書の再読を終えることが可能かもしれない。その書籍にめどがつけば、音楽理論の書籍についても再読を少々行い、福永武彦氏の小説作品を読む。昼食前に、日本企業との協働プロジェクトで用いる資料のドラフトを完成させたい。

午後からは研究計画書の最終レビューを行い、研究アドバイザーのミヒャエル・ツショル教授にそれを提出する。少し盛りだくさんかもしれないが、夕方には、来月に所属予定の米国の大学院の客員研究員の応募に関する推薦状のドラフトを完成させ、それをサスキア・クネン教授に送る。そのようなことに取り組みながら本日を過ごしたいと思う。フローニンゲン：2018/1/28（日）06:09

No.698: Application of DSA to Music Education

I just read a scientific article about resilience, which one of my friends published. This article stimulated my mind, and I convinced myself again that not only the investigation into the resilience of musical performers but also the utilization of dynamic systems approaches to developmental studies in music is crucial. So far, I've never seen any articles of applying dynamic systems approaches to music education. Although I'll search for it again, it will not be found… Here is the domain to which I can contribute from my interest and expertise. Groningen, 16:24, Monday, 1/29/2018

2064. 創造プロセスについて

作曲実践に取り組めば取り組むほど、曲を作ることの奥深さを知る。確かに、曲を作るプロセスには意識的な事柄と無意識的な事柄の双方が伴う。

作曲実践の経験を積めば積むほどに、意識的に生み出されるものと無意識的に生み出されるものの両方の質が高まっていくという現象は大変興味深いことではないだろうか。熟慮のある実践を継続させていけばいくほどに、意識的・無意識的な創造力の双方が向上していくというのは、私にとっては大変面白い現象である。

曲を作っていると、作曲者当人の意識を超えた形で様々なものが形となって出てくることがある。これは作曲のみならず、絵画や表現を司る芸術行為全般に見られることだろう。

無意識の世界から生み出された形は、私の意識を超えており、時にそれが生み出される瞬間と生み出された形に対して驚きの感情を覚える。それがなぜそのような形で生み出されたのか、説明出来る箇所も多分にありながらも、全く説明の及ばない箇所もある。そうした説明可能性と説明不可能

生が混在しているのが創造プロセスの本質なのかもしれない。私は曲を作る際にそうしたプロセスを体験し、自分の曲を解説する文章を執筆するときにもそのようなことを体験する。

過去の偉大な作曲家の多くは、タイトルさえつけない者も多く、また言葉を用いてその作品について解説することなどほとんどない。だが私は、おそらく彼らとは作曲をする意図と意義が異なるために、あえて毎回タイトルを付け、その曲に関する背景や解説を加えることにしている。時に驚くのは、その曲を解説しようと思っても全く解説できないような曲があることである。そうした曲に対しては、生み出されたその曲を聴くことによって喚起される思考や感覚を作品解説として載せることにしている。ここでも興味深いのは、当人の意識を超えた形で生み出された作品を改めて聴くと、自分の意図していなかったような言葉が生み出されることである。

意識を超越したものは意識を超越したものを呼び込む。そのような関係性でもあるのではないか、と思わされる。意識を超越した曲が意識を超越した新たな言葉を生み出すことや、その逆も起こりうる。

人間の創造プロセスというのは大変興味深い。昨年、私はタレントディベロップメントと創造性の発達に関するプログラムに所属していたのであるが、その時には気づかなかったことが少しずつ明らかになってくる。

そのプログラムに所属して、人間の創造性の発達に関する探究を進めていたことが、今ようやく形になり始めたのかもしれない。人が形を生み出すこと、形がこの世に創出されることはなんと奥深い現象なのだろうか。フローニンゲン：2018/1/28（日）06:24

No.699: From Here

I suppose that everybody often thinks: “I’ll start from here.” Yes, I’ll also begin from here.
Groningen, 08:08, Tuesday, 1/30/2018

2065. 躍動する生命と身体

今日の仕事に取り掛かる前に、最後にもう一つ文章を書き留めておきたい。今朝確認してみると、昨日は三つほどの日記を書き残していたようである。いつも平均して四つほどの日記を書き残して

いるため、昨日は平均よりも下回る形であった。そうした日の次の日の朝は、昨日書き足りなかったことが溢れ出てくるかのような現象に見舞われる。今もまさにそのような現象が自分の中に起こっている。ここでもやはり、一日のうちに自分の内側には形になろうとして待っているものが無数に存在し、それを十分に形にしなければ、形になろうとする運動はその翌日にも止むことはないことがわかる。それは自分の内側の「形象衝動」と述べていいものだろうし、「自発的な形象運動」と表現していいものだろう。

昨日も文章の代わりに曲を二つほど作っていた。その行為を通じて、自分の内側で形になろうとする現象を曲としては十分に表現していたはずなのだ。しかしそれにもかかわらず、自分の内側にはまだ随分と形象衝動を抱えたものが存在していたようなのだ。そうしたことを考えると、やはり私は曲や言葉のどちらか一方ではなく、それらの双方を媒介させる形で自分の内側の現象を形にしていく必要があるようだ。

曲を生み出すことにせよ、言葉を生み出すことにせよ、私は誰からも強制されていない。それらは全て自分の内側が要求することなのである。

この数日間で形となった曲を聴き、そこで文章として形になろうとした事柄について少々書き留めておきたい。「私たちにはどうやら快活なリズムが内在的に宿っているようである」というのは、ある曲を聞いた時に得た一つの気づきであった。時に無性に走りたくなるような、あるいは時に無性に踊りたくなるような、身体を動かすことによって何かを表現しようとする躍動する力というものが私たちには備わっているようである。

生命というのは本質的に躍動するものであるから、生命を取り巻く身体というのも本質的に躍動力を持ったものなのではないだろうか。それにもかかわらず、この現代社会においては、躍動する身体を妨げるような仕組みが多く、それは生命の躍動力を略奪し、枯渇させる方向に働いているのではないか。あるいは、それは社会的な仕組みのみならず、そもそも仕組みが生み出されるための社会的な思想とも関係しているだろう。

どこかこの現代社会には、身体の躍動性を妨げる思想的なものが無数に存在しており、それが生命の躍動力を削ぎ落としているように思えて仕方ない。そのような状況において、人間が日々の生

© YOHEI KATO 2019

活に充実感や幸福感を感じることができないというのは無理もないことではないだろうか。日々の生活に充実感や幸福感をもたらすのは、躍動する生命、そしてその生命を司った躍動する身体を通じた活動のはずである。そのあたりの根本的なところを現代人は忘れてはいやしないだろうか。フローニンゲン:2018/1/28(日)06:39

No.700: Unsatisfying Progress

I was struggling with composing music based on one of Faure's works.

I sometimes feel easy to create music referring to other composers' works, but sometimes don't. I don't find any key factor for the difference between the two phenomena.

I always choose a structurally simple work that can be seen so at a first glance, but invisible complexity may exist. Anyway, I couldn't be satisfied with today's composition progress. Rather, it was a little bit frustrating to me; it can sometimes happen in practice. Groningen, 21:54, Tuesday, 1/30/2018

2066. 他者の謎の上を他者の足で歩こうとする人間

いつも大抵、日本語でこのようにメモ書きとして日記を残す分量は、だいたい4,000字から5,000字の間に落ち着く。主題が先にあることが当然多いが、仮にそうだとしてもそれをどのように文章の形にしようかなどは一切考えていない。そう考えると、主題をある一定形式に基づいて形にしようとしないこれらの文章は悪文と言えるかもしれない。事実、悪文であり駄文である可能性が高い。だが、私たちは往々にして形式的に文章を書こうとするあまり、それを言い訳に結局何一つとして文章を書かない、あるいは文章を書けない、ということが起こりうるのではないか、ということを今朝方ふと思っていた。

形式に則って表現行為をしていくことは価値のあることであり、また大切なことである。しかし、多くの人は形式というものに飲み込まれ過ぎてはいないだろうか。形式の中に入ろうとするから何一つとして形を生み出せないのであって、形式という無数の道の上を歩くことによって身体を自然に前に進め、その過程で形を生み出していくというような意識が必要なのではないだろうか。

昨日もバルトークの生涯について調べている時に思ったが、結局、形式に飲み込まれることなく、形式という道の上を歩きながら、膨大な量の表現行為に従事し続けることによって初めて、新たな形式という自分の表現行為上の道を見出すのではないかと思った。そのように考えてみると、自己を表現するということに関しては、自分の道を発見することができない人間が多いのみならず、自分の道を歩もうとする人間もまた極めて少ないのではないかと思わされる。

この点と関係しているのか定かではないが、一昨日の曲に対して付けた解説文の内容を思い出した。そこには、「ふと気づくと、謎めく行進をするかのように人生を歩いていた、というようなことはないでしょうか？」という言葉が記されている。その文章に続けて、「人生は謎に包まれており、一つ一つの謎を紐解きながら謎めいた形で日々を生きることが、この人生を生きることなのかもしれません」という言葉があった。まさに早朝に書き留めていたように、自分の内側の現象を形にする行為は謎に満ち溢れたものであり、そうした一つ一つの謎を次の表現行為によって紐解こうとし、そこでまた新たな謎と遭遇する。

内面現象、そしてそれを表現することに関して、私たちは本当に謎に満ち溢れた形で日々を生きていることがわかる。おそらくここで重要なのは、自らの謎の上を自らの足で歩くことなのではないだろうか。他者の謎の上を他者の足で歩こうとする人間があまりにも多いと思うのは私だけだろうか。果たしてそれは自らの人生を生きていると言えるだろうか。

人は創造を宿命づけられた生き物である、と最近よく思う。だが、自らの謎と向き合い、自らの新たな謎を創造しようとしない多くの現代人を見ると、その考えは改められなければならないかもしれない。フローニンゲン：2018/1/28（日）06:39

2067. ライフワーク

起床してから二時間以上が経ったが、相変わらずあたりは真っ暗である。よくよく考えてみれば、今日は五時に起床していたから、今のこの時間帯が闇に包まれていたとしても一向におかしくはない。今日は日曜日であるため、その静寂さが一層強さを増す。そうした中にあって、小鳥の声がいつもよりひときわ鮮明に聞こえてくるのは喜ばしいことだろう。

どこからか、ピヨピヨ、チヨチヨと鳴く小鳥の声が聞こえてくる。小鳥の声に耳を澄ませ、心が洗われるような気持ちになっていると、昨日スーパーのレジで私の前に立っていた客が手に持つ花の良い香りが想起された。花々について造詣が深くないのが残念で仕方ないが、その名前のわからない花が持つ豊かな香りを忘れることはできない。

ときどき私は、街を歩いている時に、花屋の前で足を止めることがある。特に花を買うわけでもないのだが、ついつい足を止めてその花々の美しさに見入ってしまい、そこに漂っている香りの世界の中に入ってしまう。そのような体験を花屋の前でするたびに、花を生けてみたり、植物を育ててみたいという気持ちになる。いつか今後もう少し落ち着いて定住するような生活が始まったら、植物を育ててみたいと思う。

昨夜の就寝前に、「この世界でかつて最も絵画作品を描き続けた人間は誰だろうか？」という問いが浮かんだ。それに対する私の回答は、「葛飾北斎ではないだろか」というものだった。

昨年の年末に、母方の叔父と共にすみだ北斎美術館に訪れた時の記憶が蘇ってきた。北斎は寝ても覚めても、そして死の直前まで絵画を描き続けた人間であった。そのことに大きな感銘を受けていた自分をふと思い出した。そこから、一人の人間がなすライフワークについて考えを巡らせていた。

自分にとってのライフワークとは一体何なのか。それについては、先日突如として湧き上がったことが回答のような気がしている。私のライフワークは全くもって何の変哲も無い。メモを残すこと。それがライフワークだった。文章として、曲としてメモを残すことがどうやら自分のライフワークらしい。

何に関するメモだろうか。それは自分の人生を通じて得られた、人間存在に関するメモのようだ。

当然ながら、私は今後も、学術研究を行い、研究論文を執筆したり、書籍を書いたり、日本企業との協働という仕事を行なっていくだろう。しかし、それらを包摂するものとして存在している自分のライフワークは、「メモを書き残し続ける」という何の変哲も無いものだった。ただし、北斎が行ったのと同様に、メモを残すことは寝ても覚めても、そして死の直前まで継続していくべきものであり、それを行おうとする内在的な衝動が自分の中に息づいているのがわかる。

© YOHEI KATO 2019

この内在的な衝動が示唆するように、私という一人の人間にとっては、自らの固有の人生を通じて得られた体験をもとに、人間存在について文章や曲としてメモを書き残し続けることがライフワークのようなのだ。「そんなライフワークがあってもいい」と私は私に対して述べていた。フローニンゲン：2018/1/28（日）07:54

2068. 天空へと続く道

今朝は少しばかり風が強い。起床直後から風が強く吹く音が鳴っている。強風の過ぎ去る音に耳を傾けながら、今朝方過ぎ去って行った夢について思い返していた。

夢の中で私は、一人の友人と共に不思議な建物の中にいた。その建物についての説明は難しい。モダンな印象を持つその建物の一階から二階に上がると、そこにはとても大きな音楽室があった。

横にいた友人が「音楽室もこんなに立派になったんだ」とつぶやいた。その言葉から察するに、どうやらここは私たちが昔学んでいた学校のようだった。しかし、当時の面影が全くないぐらいに学校の校舎は様変わりをしていた。音楽室はガラス張りになっていて、その脇を通ると、部屋の中に数多くの生徒がおり、合奏の練習をしている。生徒たちをよくよく見渡してみると、その中に二、三名ほど懐かしい顔が見えた。小中学校時代の友人がそこに混じっていたのである。

さらによくよく見てみると、彼らは音楽室にいたのではなく、その奥にあるガラス張りのコンピュタールームにいるようだった。彼らが何をしているのかは具体的にはわからなかったが、彼らの真剣な表情から察するに、何かプログラムでも開発しているのだろうと思った。

ガラス張りのコンピュタールームの脇を通ると、そこに待っていたのは、さらに上の階に行くための奇妙なスペースだった。このスペースについても説明が難しく、建物の天井がそこだけ丸くくり抜かれており、そこから青空が見える。丸くくり抜かれた天井の真下の地面に、その丸と同じ大きさのボードのようなものが置かれている。そして、上の階とそのボードは一本のまっすぐに垂れた紐によって繋がっている。

どうやらこのボードの上に乗って、その紐を辿りながら上の階に行くらしい。いざ私がボードの上に乗ろうとすると、突然誰かがやってきた。顔を確認すると、それは中学校時代の部活の先輩だった。

その先輩は私よりも先にその上に行かせて欲しいと述べた。特に友人と私は急いでいなかったため、先輩の申し出を快諾した。いざ先輩がボードの上に乗り、その紐を辿って上に行こうとしても一向に上に上がっていかない。

紐を辿って上に上がるためには、腕力が必要であり、いやそれよりもいかに足を使って紐を辿っていくかが重要になるようだ。先輩は紐を登っていく要領が一向に掴めない様子であり、体力が消耗する一方であった。

青空の見える天井の階まであと少しというところで、その先輩は上に上がっていくことを諦め、地面に降りてきた。先輩は残念そうな表情を浮かべ、「上の階に行くのは不可能だ」と捨て台詞を吐き、その場を立ち去った。

先輩の動きを見ていて気付いたが、紐の先端を足の親指に結びつければ比較的簡単に上に登れるのではないか、という仮説を私は持っていた。友人にその仮説を述べ、実験として私が上に登ってみることにした。すると、先ほどの先輩は信じられないほどに多くの時間を使って少しずつ上に上がっていたのに対し、私はいとも簡単にすいすいと紐を登って上に上がっていった。「これは楽だね」と私は地面で待っている友人に述べた。

そのまま私は天井の方に向かっていき、いよいよ丸くくり抜かれた部分を超えて上の階まで紐を登って行った。するとそこには6名の男女がいた。そのうちの2名は大学時代の先輩であり、その場にいた全員は、私がここまで登ってきたことを祝福するかのように歓迎をしてくれた。すると、一人の女性が一言つぶやいた。

女性A:「ここまで登ってきた人は今のところ世界でたった6名だけなの。あなたは7人目ね」

その言葉を聞いた時、なぜだか私は、確かにこのような場所まで登ってくるような人間は数が少ないだろうと思った。

そこは天空に最も近い場所のように思えた。実際には建物の二階の天井からさらに上に上がっていったところであるため、一見すると三階に該当するかと思いきや、いざ天井の丸いくり抜きを超え

© YOHEI KATO 2019

てみると、そこはとんでもなく高い場所にあることがわかった。そこから地上を眺めると、地上にあるものがとても小さく見え、その高さには足がすくんでしまいそうだった。

私:「みなさんはここで何をなされているのですか？」

女性B:「ヨガです」

そのように述べた女性の足元、いやそこにいた他の6名の足元にはヨガマットが敷かれており、どうやらこの天空に最も近い場所でヨガの実践を行っているようだった。

私:「僕もこれからヨガをご一緒させてもらえますか？」

女性B:「ええ、もちろんです」

私:「ヨガをする前にお尋ねしたいのですが、ここから地上に降りるにはどうしたらいいのですか？」

女性C:「一度ここまでたどり着いた人がいつでも天上と地上を行き来できるような道を作ってあるんです」

その女性の指差す方向を見てみると、確かにここに繋がっている一本の道を見つけることができた。その道は一見すると何の変哲もなく、道の両脇に小さな柵が敷かれている。

女性C:「道の両脇には柵がありますが、そもそもその道はここまでたどり着いた人にしか見えないようになっているんです」

私はその説明を聞きながら、天空へと続くその不思議な道をぼんやりと眺めていた。フローニンゲン:2018/1/29(月)08:19

No.701: Broken Umbrella

It's very windy today. Also, it's raining outside. I went to the university building to join an internship meeting in the morning. This meeting enabled me to specify my roles and tasks as an intern. After the meeting, when I was going back to my apartment, my umbrella was broken

because of the severe wind. I remember that I purchased this umbrella in Boston seven years ago. I have to buy a new one soon, but this broken umbrella is my memento. Groningen, 10:55, Wednesday, 1/31/2018

2069. 暴走車両を追跡する夢

天空へと続く道に関する夢の内容について書き終えると、ふとその前に見ていた夢について思い出した。それは少しばかりゾッとするような夢だった。

その夢の中で私は、車を運転していた。それはパトカーのような乗り物であり、私はどうやら交通を取り締まるような仕事をしている最中だった。

私の横には仕事の同僚がおり、しばらく私が運転をしてから彼に運転を変わった。一旦道の脇に車を止め、私たちは休憩を取っていた。すると無線から、一台の車両が街中を暴走しているという連絡が入った。私たちは休憩もそこそこに、すぐにその場を離れ、暴走車両のいる場所へと向かった。

車を走らせると、すぐに暴走車両を突き止めることができ、その後方には多くのパトカーが必死に暴走車両を追跡している姿が見えた。しかし、その暴走車両の速度は普通のパトカーで追いつけるようなものではなかった。

今運転をしている私の同僚は、運転技術に定評があり、何振り構わずその暴走車両を追跡し始めた。最初は随分と車間距離があったのだが、みるみるうちに暴走車両との車間距離を詰めていく。その暴走車両に手が届きそうな距離になったところで、突然その暴走車両は運転を誤り、道の横に転がり落ちていった。気づけばそこは街中ではなく、山の中であり、その暴走車両は山道のガードレールを越えて下に転がっていった。

私たちはその場で車を止め、暴走車両の様子を確認した。肉眼でわずかばかり見えたのは、その暴走車両がひっくり返り、車から白い煙が上がっていた様子である。しばらくすると救助隊が駆けつけ、その暴走車両の回収が始まった。どうやら暴走車両に乗っていた二人の男性は一命を取り留めたようだったが、手が切断されていたり、二人の顔の皮膚は全て剥がれ、身元が確認できないぐ

らいに顔がグチャグチャになっていた。私はその光景を見てゾッとした。思わず身震いをしそうになっていた私の横で、救助隊の一人がつぶいた。

救助隊の一人:「暴走車両に乗っていた二人はどうやら有名人らしく、端正な顔立ちをしていたようです。しかし、今となってはもう・・・」

その言葉を聞きながら、私は白い煙が依然として立ち込める車の方を見つめていた。切断された血だらけの手のひらと引き剥がされた顔の皮膚が、私の足元の地面に落ちているかのような残像がいつまでも消えることはなかった。フローニンゲン:2018/1/29(月)08:36

No.702: Poster Presentation

I finished my poster presentation a couple of hours ago.

I often make a PPT presentation, but it was my first time to make a poster presentation. This style of presentation is intriguing in that I can interact with listeners more easily and more deeply. In fact, most of the listeners gave me beneficial feedback and interesting questions, which helped me develop my research further.

My supervisor told me that he preferred a poster presentation in terms of ample opportunities to interact with listeners. He shared his story with me that he obtained a research position before because of his poster presentation. A poster presentation would be a great opportunity for disseminating my research ideas and for getting a job in the academic world. Groningen, 15:19, Wednesday, 1/31/2018

2070. 夕方に向かっていくひと時

今日も相変わらず雨が降り続ける一日となっている。「そういえば昨日は日曜日であり、今日は新たな週の開始を告げる月曜日である」ということに、午後の三時を迎えて初めて気づく。

昨日は、早朝に日記をまとめて執筆して以降、そこからは一切文章を書かなかった。確かに、英文でレポートをまとめたり、研究計画書を修正したりすることは行っていたのだが、日記のような形で文

章を書くことは早朝以降全くなかった。やはり一日の半ばか夜にもう一度文章を書くことが私にとっては望ましいように思う。文章を書くことによって、心身が滑らかになるような感覚がある。それは心身のみならず、自分を取り巻く物事がうまく進んで行くことにも繋がっている。文章を絶えず執筆することは、自己のみならず自己を取り巻く事柄を前に進めていく上で非常に意味があるらしい。

今日は午前と午後に、二つのオンラインミーティングを行った。片方は佳境に入ったプロジェクトに関するものであり、もう片方はここ最近始まったプロジェクトに関するものである。自分のなすべき仕事を着実に進めていきたい。

今日はこれから、「応用研究手法」のコースの最終課題について、昨日送ってもらった友人のラーナのレポートに対してフィードバックコメントをする必要がある。このフィードバックコメントも課題の中に含まれる一つであり、分量としてはワードに半ページほどのものとなる。

ラーナが割り当てられた研究手法は、“difference in difference”というものであり、それを用いた彼女の研究アイデアと研究デザインに対してフィードバックをする。フィードバックに盛り込むべき事柄は、彼女の案について二つの肯定的な側面と二つの課題である。それらについて私の考えを盛り込みながら、ワード半ページほどにまとめていく。この課題が終われば、いくつか返信するべきメールに対して返信を行う。一つは、今年の秋から客員研究員として所属しようと思っている大学院のアドミッションへのメールである。その他にも仕事関連でいくつかメールを返答をし、それらが終われば、福永武彦氏の短編小説を二つか三つほど読み進めたいと思う。

雨がまた強くなり、空を飛ぶ鳥が少々困っているように見える。雨のせいもあってか、三時を迎えたばかりなのに、通りを走る車はヘッドライトを明々と灯している。フローニンゲン：2018/1/29（月）15:09

No.703: Reflection After Poster Presentation

Even after my poster presentation, I was still thinking about my research; or I can say that I was still digesting each comment and question by the audience. First, I'll reconsider units of analysis. My previous idea was to detect a type of variability in each week's lectures.

My targeted MOOC has seven weeks lectures, and I can reveal what kind of variability weekly lectures have. However, it might be possible to capture a variability type in each lecture. Of course, DFA (detrended fluctuation analysis), which I'll utilize in my study, requires me a sufficient amount of data set. Yet, if I reduce the size of analytical units, it may be possible to detect a variability type in each lecture.

I just checked my data sets, and I found that it would be possible to utilize DFA for each lecture, though the average number of data points is just more than 70, which is relatively small. If I can reveal a variability type for each lecture, I can show a fine-grained picture of MOOC contents.

Second, I need to add one more perspective on my research questions. My original intention was to investigate the effect of the variability of MOOC lectures on the variability of leaners' online comments and on the weekly test scores.

I plan to apply a simple correlation analysis and regression analysis. Here, I just wanted to examine the cause-and-effect relationship between lectures and learners' activities, but there is another possibility, which was pointed out by one of the listeners to my presentation.

I can explore not only the relationship between the variability of lectures and that of learners' online comments, but also the relationship between the variability of learners' online comments and weekly test scores. I determined to add a new arrow between these variables. Groningen, 15:39, Wednesday, 1/31/2018

2071. 認識世界の転調

今日も夕暮れ時を迎え、光のように過ぎ去っていく一日の終わりを強く実感させる。相変わらず小雨が降り続いており、通りを走る車が水しぶきを上げて進む音が聞こえてくる。

数日前に、ある曲を作っていた時に、哀愁が時の中に溶け込んでいくかのような感覚を覚えた。まさに今この瞬間に自分が感じているのはその時の感覚に似ているかもしれない。しかし、こうした感

覚も、何か一つの大きな流れの中に帰っていくかのようなのだ。つまり、毎日を生きる中で生じる哀愁を感じるたびに、その哀愁が何か大きな流れの中に溶け込んでいくかのようなのだ。

その流れの一つは、確かに大きな時の流れだと言えるだろう。だが、もしかすると、時以外が生み出す長大な流れというものが私たちの内側に流れているのではないか、と思うことがある。

闇に向かう世界の中で、小鳥の鳴き声が響き渡った。それはどこか晴朗な鳴き声であり、一見すると今視界に広がる景色の様子と調和をなさない。しかし、こうした短調の音楽が奏でるような景色を背景にするがゆえに、長調のような響きを持つ小鳥の鳴き声が美しく響くのかもしれない。そうしたことを考えてみると、短調の音楽が持つ色彩感を帯びたこの景色は、この世界を構成する上で不可欠なのだと思う。

短調を背景に、長調の音が鳴り響く時、その背景のものはもはや短調と単純に定義することができないのかもしれない。長調の背景にあるがゆえに、それはもはや長調だと捉えることができるかもしれない。それは認識における転調である。

認識の転調を経てみると、窓の外に広がる景色は随分と様変わりして見え始めた。刻一刻とこの世界が帯びる調が変化していく。世界は様々な調で構成されており、それは絶え間ない転調を静かに繰り返し続けているものなのかもしれない。書斎の窓の外の景色はそれを静かに伝えている。フローニンゲン：2018/1/29（月）17:31

No.704: Internship Planning

Since my research internship on MOOCs will begin next week, I need to make a concrete schedule to clarify when and what I'll do. Of course, it is ideal to make it before the internship, but because I have a final meeting on February 5th before the internship, I can finalize my schedule and planning on that day.

My internship supervisor provided me with a room for work. So, I'll work on finalizing my planning in the room. Probably, since I'll have extra time on that day, I can start my research project. The first procedure is to make a list for course relevant concepts of a MOOC that I'll investigate.

After making this list, I'll begin to arrange data formats to conduct analyses. Perhaps, I'll have to do this data preparation by the second or third week of the internship. Once I complete it, I can start data analyses. Groningen, 15:50, Wednesday, 1/31/2018

2072. 内面現象の記録的文章化と夢

今朝は六時前に起床し、六時過ぎから本日の活動を開始させた。昨日は一昨日と異なり、早朝のみに日記を書き残すのではなく、午後や夕方にも日記を書き留めていた。そのおかげもあってか、就寝も速やかであり、睡眠の質も高く、かつ朝の目覚めも良かったように思う。文章を異なる時間帯に書き留めることによって、その時々の事柄が整理されていったことが大きな要因かもしれない。一日の異なる時間帯に内面現象を文章化していくことの効果については仮説の域を出ないが、本日からそれを意識的に検証してみようと思う。

今朝方見ていた夢も、昨日の朝の夢に引き続き、印象に残るものだった。ただし、昨日の夢ほどには記憶が定かではない。今朝方の夢の中では、私は夢を俯瞰的に見る存在としてそこに存在していた。つまり、夢の中の登場人物の一人として自分がいたのではなく、登場人物は他に様々存在しており、彼らの行動を彼らに気づかれないような透明な存在として俯瞰していたのである。

印象に残っている場面として、何人かの役者たちが洞窟に集まり、そこで映画か何かの撮影をしていたことが挙げられる。映画のワンシーンの中に、イタリアワインの入った巨大な瓶の中に一人の俳優が飛び込むというものがあった。それはワインの樽ではなく、ワインが入った瓶だった。一人の俳優がその場に服を脱ぎ捨て、躊躇しながらも意を決して巨大な瓶の中に飛び込むシーンの撮影が始まった。

その俳優は瓶の中に勢いよく飛び込み、その中で今にも溺れそうな様子の演技をしている。周りの役者たちも演技を始め、瓶の中でもがいている俳優を心配そうに見つめている。この後も演技は続いていたが、今はもう記憶に残っていない。ただし、そこから夢は続き、今度は私も夢の中の登場人物の一人になった。

次の夢の場面では、東京を観光するような設定になっていた。特に、スカイツリーに登り、その中にある博物館で展示物を見ているようなシーンが印象に残っている。なぜだか私はこの場所にここ数

年毎年来ているようであり、おそらく今回が三回目であった。今回の訪問時になってようやく、展示物の内容がこの三年間一切変化していないことに気づいた。それに気づいた時、もうこの場所に訪れることの意味はほとんどないのではないか？という思いがやってきた。私はしばらくここを訪れまいと決心し、その場を後にした。

このような内容の夢を今朝方見ていた。夢を見ることそのものが自己の存在にもたらす作用と、夢を書き留めることが自己の存在にもたらす作用についてはもう少し考えを深めていく必要があるだろう。それらには確かに「作用」と呼ばれるものが含まれていると実感しているが、その作用が何なのかをより具体的に掴みたいと思う。日々小さなことに関心が向かい、その関心を自分なりに探究していこうとする癖が私にはあるようだ、ということを昨夜も思っていた。内面現象の記録的文章化にせよ、夢にせよ、日々の私を取り巻く事柄への関心は尽きない。フローニンゲン：2018/1/30（火）06:47

No.705: Palpable Progress

Since yesterday, I've started to read a book about chord progressions. This is my second reading. I remember that I couldn't fully understand the details in this book. However, my continuous composition practice and learning with other books unknowingly cultivated my understanding of chord progressions.

Invisible learning has always been happening within me. Whenever I read a book again, I can notice my palpable progress of understanding. Today's reading and composition practice will be leading to my future progress. Groningen, 18:29, Wednesday, 1/31/2018

2073. 水平的・垂直的発達に内在するある感情について

一日の活動の開始に合わせて、リストのピアノ曲をかけた。これまでリストの曲を早朝に流すことはそれほどなかったように思う。リストの曲に耳を傾けていると、そういえばリストもまたハンガリー出身であったことを思い出した。

先日、ハンガリー出身のバルトークについて調べていたことは以前の日記に書き留めていたように思う。ちょうどこの四月にワルシャワとブダペストに滞在する計画を立てており、ブダペストを訪れる

際に、ぜひともバルトーク博物館を訪れようと思っていた。今朝、リストについても関心が向かったため、少し調べてみると、そういえばリスト博物館もブダペストにあることを思い出した。偶然にも、以前ネットワーク科学の探究のために進学を考えていた、中央ヨーロッパ大学の目と鼻の先にリスト博物館がある。

昨日はラヴェルの曲に範を求め、一昨日はバッハの曲に範を求めていたように、今の私は様々な作曲家の作曲思想や作曲技法を学ぶ段階にある。そうした中で、これまでリストはその対象になっていなかった。リストが偉大な作曲家であることは重々承知であったが、どうもこれまではあまり範を求めようという意欲が湧かなかった。だが、早朝に訪れた小さなきっかけ、つまり「リストについて少し調べてみよう」と私に思わせた何かが契機となり、これからリストにも範を求めようという意思が芽生えた。

非常に些細なことかもしれないが、リストが生誕した日と私が生誕した日は一日違いであり、一日の違いの中に何か重要なものを見出している。自分を超えたところにある何かが、リストという存在に向き合うことを促したように思えてくる。少なくとも今日は一日中リストの曲を聴こうと思う。

今朝方の夢について書き留めた後に、ふと一昨日の朝方に見ていた夢について再度思い出した。それは天空にある不思議な場所に向かっていく夢だった。

夢の最後に、天空へと続く道を眺めていたことは昨日の日記に書き留めていたように思う。ただし、昨日の日記で書き留めていなかったのは、夢を見ていた当人である私の感情であった。

あの夢に凝縮されていたのは、水平的なものが持つ内在的な安らかさと垂直的なものが持つ内在的な恐怖だったのではないか、と突然思った。これは何か人間の水平的・垂直的な発達現象が持つ特性と関係があるように思えて仕方ない。

人は水平的な道を歩むこと、つまり水平的な発達を遂げていく最中にあっては、主要な感情は安堵感なのかもしれない。天空へと続くあの道は、天上から見れば、地上からほぼ水平な形で徐々に天上に向かっていた。その道を眺めた時、その道が持つなんとも言えない安らかさが自分を包んだのを覚えている。一方、天空に待つ不思議な場所に辿り着き、その場から地上を眺めた際に、実は恐怖の感情が湧き上がっていたことは昨日の日記に書き留めていなかった。いやもっと言ってしま

えば、天空のその場所に登っていく最中にも絵も言わぬ恐怖の念が自分の身体に絡み付いていたのである。

そこには上昇する恐怖と下降する恐怖の双方があった。これこそまさに、人間の垂直的な発達に内在する恐怖でなないだろうか。人は上にも下にも垂直的に進むことに対して、恐怖の感情を深層的な部分において抱くものなのではないだろうか。

上昇への恐怖は、自己の存在が持つ可能性が生み出す逆説的なものなのかもしれない。端的には、自己の潜在的な可能性が未知であるがゆえに、その未知に自己が向かっていくことには内在的な恐怖が付きまとうのである。一方で、下降への恐怖は、自己の深層的な部分を覗き見ることの恐怖と関係しているように思える。

人間の内側の世界は、上にも下にも無限に広がる領野が存在しており、その無限性が独自の恐怖感を私たちに覚えさせるのではないか。ただし、これも人間存在が生み出す「恐怖」に過ぎないのであるから、恐怖の先にはまた何か別の感情をもたらすものがあるに違いない。フローニンゲン：2018/1/30（火）07:15

No.706: Dignified Steps

I'm often struck by a way of living with dignified steps. Our way of living can be fathomlessly august. Groningen, 21:54, Wednesday, 1/31/2018

2074. ポスタープレゼンテーションに向けて

今日は先ほど大学のキャンパス近くにあるコピー屋に立ち寄り、明日のポスタープレゼンテーションのために、発表用のポスターを印刷した。

これまで研究発表をするときはいつでもパワーポイントを用いたものであったため、ポスタープレゼンテーションは今回が初めてである。明日は教育科学学科に所属する修士課程と博士課程の者たちが一堂に会し、自分の研究のポスタープレゼンテーションを行う。普段足を運ぶキャンパスとは異なり、街の中心部から少し外れた場所にあるキャンパスが会場だ。

教育科学学科のディレクターを務めるダニー・コストンス教授から先日連絡があり、今回のフォーラムに関する案内資料がPDFで届いた。それを見る限り、一種のフェスティバルのような印象を持った。教育科学学科には現在60名近くの学生が在籍しており、その中で英語でプレゼンテーションを行うのは、どうやら同じ研究グループのハーメンと私だけのようだ。残りの者たちはオランダ語で行うらしい。送られてきた案内資料も全てオランダ語であるため、読解するのが厄介なのだが、そうしたことが読み取れる。

昨年在籍していた発達科学学科はプログラムが全て英語で構築されていたため、こうした翻訳の手間を取ることなど一切なかった。今年在籍している「実証的教育学」のプログラムも英語で構築されたものなのだが、そのプログラムを統括する教育科学学科の中にあるその他のプログラムは全てオランダ語であるため、まだこうした言語上の問題が発生してしまうようだ。

英語との言語的隣接性もあるため、オランダ語であってもどのようなことが書かれているのかは大体わかることが多いが、時に翻訳をしながら読み進めないとならないことがあるのは確かだ。フローニンゲン大学の教育科学学科が発達科学学科と同様に、より国際的に開かれたものになるためには、プログラムの説明なども含めて英語化を進めていく必要があるだろう。

近所のノーダープラントソン公園を通り抜け、今まで足を運んだことのない場所にあるコピー屋に向かった。今日は、本当に珍しく天気がいい。天気に恵まれた日のフローニンゲンを歩くことは、こうした寒さの中にあって、しみじみとした幸福感を滲ませる。

コピー屋に事前にポスター資料を送り、到着後すみやかに印刷をしてもらった。所要時間は10分程度であり、仕事の手際の良さに感謝をした。完成したポスターを受け取り、コピー屋を後にした時、明日のポスター発表に向けて心が高鳴っている自分がいた。確かに明日は学術的なフェスティバルのようだ。フローニンゲン：2018/1/30（火）14:57

No.707: Diligent Practice

I really want to compose music as spontaneously and freely as possible. Like writing English, no, like writing Japanese, I wish my music to fully express what I think and feel at every moment.

Until I can attain that level of music composition, it may take several years from now. Yet, several years from now are not so far in my life.

If I can acquire composition language and naturally express what I want, it is worthwhile devoting myself to diligent practice for several years. Groningen, 10:18, Thursday, 2/1/2018

2075. あの夕焼け空

久しぶりにフローニゲンの夕焼けの美しい姿を見た。今日は幸いにも一日中晴れていた。

今私が生活をしているフローニンゲンにおいて、この季節に雨が一日のどこかで降らないことは珍しい。だが、今日は一度も雨に見舞われることなく、太陽の光を存分に浴びることができた。

そうした一日の最後の輝きとして、赤紫から薄赤紫色に変わっていく夕焼け空を拝むことができた。この光景は本当に久しぶりであったから、私はしばらく仕事の手を休めて、書斎の窓からこの夕焼け空を飽きずに眺めていた。

時刻は夕方の六時に近づいているが、今もまだ遠くの空にかすかに輝く薄赤紫色の光景を見ることができている。そういえば、気づかないうちに日が伸びている。六時を迎えるこの時間帯において、世界はもう闇ではなくなったのだ。今日のこの夕日は、それを私に知らせるためにあったのかもしれない。

深い闇の世界は季節の変遷に応じて徐々に光の世界に居場所を譲っていく。もちろん、闇の世界と光の世界は常に対等な関係にあるから、闇の世界が完全に光の世界に居場所を譲ることはない。両者は共に、全体として絶妙な調和関係の中でお互いの強さを変えていくのである。

先週か先々週に曲を作っていた時に、ペガサスという生き物について思いを巡らせていた。それは基本的に神話上の生き物なのだが、それは私たちの内側に実在している生き物なのかもしれないという考えが私の中に生まれていた。それは私たちの生命の躍動感を司る存在として生きており、その存在こそが私たちの日々を充実したものにしてくれるのではないか、そんなことをぼんやりと考えていた。

暮れゆく夕日を眺めながら、今日は就寝までの時間を用いて、明日のポスタープレゼンテーションに向けて発表内容を再度確認しておこうと思う。発表自体は15分間のものであり、60分の枠のうち、同じ部屋を共有する三人と順々に発表していくのか、それともポスタープレゼンテーションであるから、部屋の三箇所に散らばって、15分間の発表と質疑応答のセットを二、三回繰り返すのかはまだ定かではない。いずれにせよ、発表内容の項目は再度確認しておく必要があるだろう。この準備が終われば、残りの時間は全て作曲実践に充てたいと思う。

一日中の晴天のおかげもあり、今日は普段と違った形で充実感を覚えるような日であった。明日もまた今日とは違った形で充実した一日になるだろう。日々が充実感の連続として流れていき、その流れは一段と深い充実感へと絶え間なく接続されていく。フローニンゲン：2018/1/30（火）18:04

No.708: Our Conviction

Our conviction toward uncertainty that “if it is so, that is so” almost always partakes of our zest. Groningen, 10:39, Thursday, 2/1/2018

2076. 無意識の発達運動について

今日は早朝から雨が降っている。起床してみると、窓ガラスに雨滴がぶつかる音が静かに聞こえてきた。

三日連続して、今朝の夢の内容もまた記憶の中に残っている。ただし、それは少しばかり断片的なものになりつつあるため、覚えている範囲で足早に書き留めておきたい。

夢の中で私は、ある教室のような部屋の中で、一人の小学生の男の子と話をしていた。その男の子はとても頭脳明晰であり、その口調などからあまり小学生のようには思えない。一方で、礼儀もしっかりと身についているようであり、私はどこか大人と対話をしているような感覚を覚えていた。彼に将来のことについて尋ねてみると、今はまだ将来何をしながら生きていくかについては明確なものを持っていないようだった。

興味深かったのは、彼がおもむろにスマートフォンを取り出し、「この使い方に関してはわかっているのですが、この機器を通じて父から何らのタスクも与えられないのが残念です」と述べたことであ

る。話の流れを思い出すと、将来自分が何をやって生きていくかは、様々な仕事を経る中で見つけていくという考えが彼の中にあり、そうした仕事の一つを父から与えてもらいたいという彼なりの考え方があるようだった。私は彼のその発言を聞いて、思わず笑顔になり、彼とその後も会話を続けていた。

夢の記憶がどんどんと断片化していく。おそらく私たちは、もともと非常に断片的な記憶を一つの総体として夢にまとめ上げていくのだと思うが、ひとたび夢を見ると、その総体が溶解していくかのように再び断片的なものになっていく姿を見ることができる。つまり、夢を取り巻く記憶の統合化と断片化が起こっているのである。もしかすると、「断片化」は「差異化」と言い換えることができるかもしれない。

もしそれが可能であれば、夢はひとつの発達現象として扱うことができる。差異化と統合化は発達の根幹原理であり、夢はもしかすると、そうした原理に則って発達運動を続けているものなのかもしれない。もちろん、夢の内容に発達段階のような構造特性を見出すことは難しいし、むしろそれは不可能なことかもしれない。それほどまでに夢の世界で現れる現象は、段階特性としてはバラバラである。

もしかすると、私たちの顕在意識において発揮される発達段階の変動性は、こうした無意識の特性によるものかもしれない。つまり、無意識そのものは固有の段階特性を持たず、変幻自在にその姿を変えることができるのである。あるいは、そうした変幻自在に姿を変えるものを生み出す場として存在しているのである。

場そのものには発達段階はない。だが、場そのものも統合化と差異化の運動を行っているがゆえに、夢の内容や性質が異なるのではないだろうか。すなわち、夢の文脈変化が起きる背景には、夢を生み出す無意識の統合化と差異化という運動があるからなのかもしれない、という考えが浮かぶ。そうした動的な運動を行っているからこそ、夢の内容や性質は千変万化するのではないだろうか。

相変わらず無意識や夢には謎が多く残っており、その謎を一つ一つ紐解いていく試みには思わずのめり込んでしまう要素が多分に含まれている。まさに無意識や夢に包まれて生きているような感覚が引き起こされる。フローニンゲン：2018/1/31（水）07:29

No.709: Precursor of a New Season

It has been rainy in Groningen in the last several days. Although it will continue to be sunny from tomorrow, the temperature seems to be below zero. I sometimes feel breeze in such days as a precursor of a new season. Groningen, 11:30, Friday, 2/2/2018

2077. 思い出の品

今日は早朝からザーニクキャンパスに足を運び、研究インターンシップに関するミーティングを行った。朝から少し雨が降っており、風も強かったが、私が家を出発した頃はちょうど雨が上がっていた。ただし、空は雨雲に覆われており、天気予報が示しているように、いつ雨が降り始めてもおかしくはなかった。30分ほど歩き、ザーニクキャンパスに無事に到着した。

今日のミーティングは、フローニンゲン大学のMOOCを統括するジャン・ディエナム博士とMOOCチームのリーダーを務めるトム・スピッツ氏と行った。今日のミーティングでは、私がインターンとして行う業務内容を決定することに焦点を当てたものである。

研究上、これまでMOOCに関する学術的な論文を数多く読んできたが、果たしてMOOCの制作現場はどのようになっているのか、という実務的な側面にも私の関心が及び始めていた。そうしたこともあり、今回のインターンシップでは、もちろんデータの共有を受けて私の研究を進めていくことになったが、それに付随して、MOOCのコンテンツ制作の現場を訪問することや関係当事者とのミーティングに参加することなども承諾してもらった。また、ディエナム博士の隣の部屋を提供してもらい、来週からはそこで様々な作業を行う。インターンの期間や、週にどれだけ働くかも含めて自分に決定権があり、かなり自由な形でインターンを進めることができるのは喜ばしい。

一応目安の期間は二ヶ月であり、三月末を終了予定にしていたが、スピッツ氏と話し合い、これから受け持つ仕事内容に応じて、四月の初旬までに期間を延長していいかもしれない。インターンの開始に際して、データを扱う際の守秘義務契約を来週の月曜日に結ぶことになった。

スピッツ氏曰く、ちょうどこれから面白いプロジェクトがいくつか始まるようなので、関連プロジェクトのミーティングやMOOCに関する各種イベントの開催日時をリストとして送ってもらうことにした。来週からのインターンに期待が高まる。

ミーティングが比較的早く終わり、ちょうど午後から行われるポスタープレゼンテーションに向けた準備に時間を取ることができると思い、足早に自宅に帰ろうと思った。しかし、キャンパスを出た頃に、ちょうど再び雨がポツポツと降り始めた。しかも、極めて強い風と共にである。強風と雨の組み合わせほど厄介なものはないだろう。

なんとか30分かけて自宅に戻ると、これまで長年愛用していた折り畳み傘が破損していることに気づいた。かれこれ今から七年前に、発達心理学者のロバート・キーガン教授に会いにボストンを訪問した時にこの傘を購入したことをふと思い出した。

あの日から今日までの七年間、この折り畳み傘には随分とお世話になった。諸々の思い出の詰まった傘だけに非常に惜しいのだが、この傘に別れを告げ、今日のポスタープレゼンテーションの帰りに新しい傘を購入しようと思う。いつかまた今日のことを思い出す日が来るだろう。フローニンゲン：2018/1/31（水）11:22

No.710: Business Industry

I spent much time today to work on a couple of collaborative projects with Japanese corporations. The collaborative work always invigorates me, which is quite intriguing. It provides me with not only new perspectives but also precious opportunities for me to reflect upon the meaning of my work. Also, it inevitably requires me to contemplate the peculiarities of the business industry (e.g., its worldview, action logic, etc.). Groningen, 21:01, Friday, 2/2/2018

2078. 祭りの後：ポスタープレゼンテーションの終了

先ほど無事にポスタープレゼンテーションを終えた。ポスタープレゼンテーションとはこんなにも面白く、こんなにも有益なものだとは思ってもみなかった。

私はこれまで自分の研究を発表するときや、学術の世界のみならず企業社会で何かプレゼンテーションをする際は常にパワーポイントを用いてきた。これまで参加した学会を振り返ってみると、必ずどの学会にもポスタープレゼンテーションというものが行われていたが、私はあまりにそれに関心を払ってこなかったし、その意義を無検証な思い込みに基づいて幾分過小評価していたように思う。

しかし、今回ある意味強制的にポスタープレゼンテーションをする場を与えられ、実際にそれを行ってみると、非常に意義のあるものだということがわかった。例えば、学会の場において、パワーポントを用いたプレゼンを多くの聴衆にする場合、大抵の聴衆は黙っており、質問をするのは数人程度だろう。端的に述べると、学会の場におけるパワーポイントを用いたプレゼンテーションは、どうしてもインタラクティブな要素が削ぎ落とされてしまっているのである。これは何も30分を超すような長めのプレゼンテーションのみならず、より短い15分程度のプレゼンテーションでもそうだろう。

実際に私が過去に行った学会発表を振り返ってみると、そこで質問をする人は少数であり、質問も単発的なものであり、聴衆との対話を行っている感覚は一切しなかった。一方で、今日初めてポスタープレゼンテーションを行ってみると、それは非常にインタラクティブなものであることがわかった。過去に私もポスタープレゼンテーションに聴衆として参加したことは何度かあるが、実際に発表者側に回ってみると、その場がいかに有意義なものかということに気づかされる。

同じ研究グループに所属している友人のハーメンと私は、同じ部屋でポスタープレゼンテーションを行うことになっており、先に到着して発表を始めていたハーメンの様子を見ながらポスタープレゼンテーションの準備に取り掛かった。あまり良い喩えではないかもしれないが、ポスタープレゼンテーションはお祭りの時に自分の店を出すようなイメージだ。

ハーメンの研究は、ゲーミィフィケーションの教育効果に関する研究であり、ゲームと学習を扱っている点においてとても魅力的な研究内容である。そのため、先に同じ部屋にいたハーメンの前には何人かの人が集まっており、「ハーメンの店はだいぶ繁盛しているな」とはた目から眺めていた。「果たして自分の店に人は来るだろうか？」という考えが頭をよぎる。

未だかつてポスタープレゼンテーションの場でこのようなことをしている研究者を見たことはないが、日本の祭りでの出店の様子を思い出しながら、“Interesting research is here! Please come and see

it!”とでも叫びながら人を呼ぼうか迷った。そのようなことを考えていると、一人目のお客が来た。その人の方を振り返ると、研究アドバイザーのミヒャエル・ツショル教授だった。

失礼だが若干拍子抜けをしながらも、ツショル教授と挨拶を交わしていると、私の店に人が入っていると勘違いしたのか、何人かの人たちが私のポスターの前にやってきた。そこからようやく私の出し物の紹介が始まった。

昨日ポスターを印刷しにコピー屋に訪れた時、当日のポスタープレゼンテーションはフェスティバルの一種だと直感的に思っており、期待感が高まっていたが、まさにその通りになった。

私がポスタープレゼンテーションをできる時間はわずか一時間と限られていたが、幸いにも何人もの人が私のポスターの前で立ち止まり、そこで様々なやり取りをすることができた。非常に有益なフィードバックや質問が多く、自分のこれからの研究がさらに発展を遂げていくであろうことを実感させるには十分であった。

今年の五月に行われるアムステルダムでの国際ジャン・ピアジェ学会と六月に行われるロンドンでの国際学習科学学会では、ポスタープレゼンテーションではなく、パワーポイントを用いた論文発表のセクションに応募したのだが、今日の体験を通じて、科学者としてのキャリアの初期において、もうしばらくはポスタープレゼンテーションを数多く行ってもいいかもしれないと思った。

ツショル教授もかつて、ポスタープレゼンテーションによって自分の研究アイデアを紹介し、そこで様々な研究者とやり取りすることによって、米国の大学で研究者のポジションを獲得したことがあったそうだ。非常にカジュアルな形で研究者同士で会話をすることができるというのは、ポスタープレゼンテーションの一つの魅力だろうし、それが職を得ることにも十分繋がりうるというのはまた一つの大きな意義だろう。フローニンゲン：2018/1/31（水）16:19

No.711: Business World and Zoo

The business world is becoming more and more technically sophisticated, whereas it still maintains an immature worldview. “Is the business world like a technically advanced zoo?” I came

up with such a question. There are a number of lions with sharp teeth and a bunch of powerful gorillas in the business world. Groningen, 21:08, Friday, 2/2/2018

2079. ポスタープレゼンテーションの振り返り

ポスタープレゼンテーションを終えた後、その場で得られたフィードバックや質問を振り返りながらフローニンゲンの街を歩いていた。それらのうちとりわけ重要なものはメモとして書き留めており、そのメモの内容を頭の中で反芻しながら、ここからどのように研究をさらに発展させていこうかと考えを巡らせていた。

やはり自分の研究のためか、一つ一つのコメントや質問に対して、必ず自分なりの考えというものがあり、それをこちらから述べることによってやり取りが充実したものになっていくということを経験していた。確かにコメントや質問の中には、その場ですぐに明確な回答を述べることのできないものも含まれていたが、大抵はその場で何かすぐにこちらの考えが生まれてくる。

これはおそらくどの研究者にも当てはまるのだろうが、それぞれの研究者は自分の研究領域については説明責任を有しており、一人の個人が行なう研究というのは非常にユニークなものであるがゆえに、研究者はおそらく自分の研究テーマについて一番詳しく知っている者と言えるだろう。当然、自分の研究テーマの中にも、個別の分析手法を取り上げてみれば、世界にはもっと詳しくそれについて知っている人はいる。だが、そうした分析手法の活用方法を踏まえて、全体としてそのテーマについて一番詳しく知っているのは研究者本人だろう。

今日のポスタープレゼンテーションの場では、自分が定めた研究テーマに関する説明責任は自らにあることを自覚しながら、こちらの知っている範囲のことはできるだけ誠意を持って伝えることができていたように思う。ただし、パワーポイントでの発表とは異なり、その場に立ち寄ってくれた一人一人の研究者の関心に合わせながら説明をより柔軟に変えていく能力が今後はさらに求められるように感じた。

研究に含まれるいくつかのエッセンスを明確な言葉で端的に説明できるように準備しておく必要性は当然にあり、詳細な説明を求められた時にはそれに対応できるように準備をしておく必要がある。

自分の研究であるだけに、周辺知識を多く持っているためか、冗長に説明することならいくらでもできるが、今日の場での体験を思い出すと、意外と端的にメッセージを打ち出していくことが難しいように思えた。

仮に今回の研究を六月に終え、今度は研究成果に関するポスタープレゼンテーションがあれば、ぜひとも今日の経験を活かしたいと思う。研究成果を発表する際には、今日のポスターのように文字を多くする形ではなく、よりビジュアル的にも見やすいものに心がける必要がある。特に研究結果を示す図表やグラフなどを上手く活用し、自分の「店」に立ち止まって出し物を眺めてもらえるように工夫をしたいと思う。とりあえず今日は無事にポスタープレゼンテーションを終え、いよいよ来週からはMOOCに関する研究インターンが始まる。

今朝、ジャン・ディエナム教授が提供してくださった自分のオフィスの場所を確認し、来週からは週に一日か二日はそこで研究に打ち込みたい。来週からはまた新たな充実感が日々にもたらされることになるだろう。フローニンゲン：2018/1/31（水）16:38

2080.「1993年夏」

私の元に一通の封筒が届けられた。差出人は父からであった。

「父から？」と私は不思議に思いながら、その封筒を開けた。すると中から四枚のテレフォンカードが出てきた。

「テレフォンカード？一体これはなんだろう？」と私はさらに疑問に思った。しかし、父は昔会社員をしながら絵を描いていた頃、その絵がテレフォンカードになったことがある。そこには、家族三人が可愛らしいハリネズミの親子として描かれており、気球に乗りながら星のきらめく夜空を親子三人で眺めているような絵だったように記憶している。そうした背景があったため、私は受け取った四枚のテレフォンカードもまた父の絵か何かだろうと思った。

スマホがこれだけ発達した現代において、テレフォンカードを使う場所はもはやほとんどないのだが、この四枚のテレフォンカードには使用価値では測れない、より尊い価値があるように思えた。

私は四枚全てのテレフォンカードに目を通してみた。すると、どれも油絵のような形で絵が描かれていた。ただし、私がこれまで見てきた父の画風とどうも違う。

四枚のうちの一枚を手に取り、それをよくよく眺めてみると、そこに「1993年夏」という文字が記されていた。「1993年夏？」という問いに対して、まず私はその数字が意味することを社会的な出来事に関する記憶として探っていた。しかし、一向にその意味は明らかにならず、そこで私は自らの記憶を辿ってみた。

「1993年夏？あの頃は確か・・・そういえばこの絵に書かれている場所は妙に見覚えがあるなぁ」という言葉の後、すぐに私は何かを思い出したかのように言葉を新たにつぶやいた。

「1993年夏、あぁ、この絵はもしかして・・・」その絵が何を示しているのか、ようやくその一部がわかった。

何か一つの重要な記憶を取り戻した私は、その絵を見ながら目頭を熱くさせ、涙が滲んだのと同時に、その絵の中の世界にいた。

セミの鳴き声がする。数多くのセミたちが合唱を行っているかのように鳴き声を上げている。夏休みの最中だったあの日、私は通っていた小学校にいて、そこで友人たちと遊んでいた。

どのような遊びをしていたのかは定かではないが、燦然と輝く太陽のもと、友人たちと一緒になって校庭を走り回り、一旦休憩するために校舎と校舎の間にある渡り廊下の木陰で休んでいたあの時を思い出した。

そこから見た景色と先ほどのテレフォンカードに描かれた絵が完全に合致していたのである。太陽の輝き、校庭の様子、校庭を取り巻く生命力に溢れた緑など、全てがあの日のあの瞬間の光景を映し出していた。

先ほど、目頭が熱くなったのは、この懐かしさのためだろうか。そこからさらに私の記憶は物語を先に進めていた。

© YOHEI KATO 2019

木陰での休憩後、私たちはまた元気一杯に校庭で遊び、気づけば夕暮れ時を迎えていた。小学校時代の夏休みに見る夕暮れの景色は、大人になった今の私が夏に見る夕暮れの景色とはもはや同じではない。

あの頃にしか見ることのできなかった心的景色があるということ。同時に、大人になった私が今見ることのできる心的景色もまたこれから変わっていくものであるがゆえに、今の私が見ることのできる景色は一人の人間の生涯において極めて貴重なのだということを改めて知る。

友達も私も思いっきり遊び、何の悔いもないような形でその日を謳歌したという感覚が共有されていた。日が暮れ始めたため、私たちは別れの言葉を交わした。

また明日も明後日も、今日と同じような日が続くと誰もが信じて疑わなかった。明日もまたみんなで今日と同じように校庭を駆け回ることができるということを疑う者は、そこには誰もいなかった。それなのに、別れの挨拶をするときには、ちょっとばかり哀愁のようなものが漂っていた。太陽が沈みかける中、一人の友人が私に別れの言葉を述べた。

A君:「洋平君、今日は楽しかったね。また明日も遊ぼうね」

私:「うん楽しかったね。じゃあね」

私はその時、「また明日も遊ぼうね」という言葉を述べることができなかった。というのも、私がこの街に住むのは今日が最後であったからだ。私はそれを忘れようとするかのように、校庭をいつも以上に駆け回っていたのではないかと思う。次の日から私は、小学生の自分には聞いたこともないような地名の県に引っ越すことになっていた。

私はそのことを友人の誰一人にも打ち明けることができなかった。

その場にいた全員が別れの言葉を交わした後、校庭には誰もいなくなった。そこにいたのは大人になった私一人だった。

© YOHEI KATO 2019

私はあの時自分がいた校庭で、あの日のことを思い出していた。空にはまだ太陽がかすかに残っており、昼間とは打って変わって、そこには線香花火のような夏の夕日があった。

誰もいなくなった校庭で夕日を眺めていると、誰かが後ろから私に声をかけた。

誰か:「あれっ？もしかして･･･洋平君？」

自分の名前が聞こえた瞬間に、私は思わず振り返った。そこには、先ほど別れたA君が大人になった姿でたたずんでいた。

私:「もしかして、A君？」

A君:「そうだよ。久しぶりだね！」

A君と私はその場で握手を交わし、あまりの懐かしさにお互いにハグを交わし、背中を叩き合った。

私:「あの時は･･･あの時は本当にごめんね」

A君:「いいんだよ。確かにあの時は、僕だけじゃなく、突然洋平君が引っ越したことをみんなショックに思っていたけど、何も言わずにこの街から去った理由を今なら何となくわかるよ」

その後、A君と私はその場でどれほどの時間を一緒に過ごしただろうか。あの時の夏の日々を振り返り、随分と思い出話をしていたように思う。

A君と私が話をしている光景が、レンズを通してズームアウトされるように引いていき、私は再び四枚のテレフォカードを眺めている自分に気づいた。

残り三枚のカードにはどのような記憶が詰まっているのだろうか。そのようなことを思った時、夢の場面が変わった。フローニンゲン:2018/2/1(木)07:11